

2016年3月6日 主日礼拝説教（要旨）

聖書 ルカによる福音書第12章22～34節

「小さな群れよ、恐れるな」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

「だから、言うておく。命のことで何を食べようか、体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切だ・・・」（22～23節）。よく知られた御言葉です。初めて聖書を読む人にも余計な説明をしなくても分かってもらえるし、訴える力のある御言葉です。けれども、一連の言葉は、「それから、イエスは弟子たちに言われた」と始まっています。つまり、これらの教えは、群衆に向けてというよりも、主イエスのそばにいた弟子たちに対してまず語りかけられたのです。

主イエスは弟子たちに、ファリサイ派の人々のパン種、つまり偽善に注意しなさいと言われ、また、どんな貪欲にも用心しなさいと言われました。それらに続いてこの教えがあります。貪欲と思ひ悩みは両極端の現象のように見えます。貪欲は持っている者が必要以上に欲しがることで、思ひ悩みは持たざる者の思ひみのように見えるからです。しかし、貪欲と思ひ悩みは、どちらもいのちの主である神のご支配に対する信頼を見失った私たちの不信仰の表裏なのです。

主イエスは繰り返して「思ひ悩むな」と言われます。ところで、ここで使われているギリシア語の単語は、いつも悪い意味で使われているわけではありません。パウロはこの単語を用いて次のように書いています。「(体の) 各部分が互いに配慮し合っています」（Ⅰコリント12:25）、「あらゆる教会についての心配事があります」（Ⅱコリント11:28）、「テモテのようにわたしと同じ思ひを抱いて、親身になってあなたがたのことを心にかけている者はほかにいないのです」（フィリピ2:20）。いずれも、教会を形成する中で、あの人この人のために心を砕いているのです。これらの心遣いが無意味なわけではありません。

したがって、ここで言われていることは、心を配ることがいけないとか愚かなことだとか言うことではないし、信仰をもってれば、悩みや心配事はなくなるなどという単純な話でもありません。いのちの主である神への信頼をもってすこやかに生きよ、ということなのです。

そこで、主イエスが私たちに示してくださっているのが鳥と野の花です。マタイによる福音書では「空の鳥」ですが、ルカは律法によると汚れた生き物で、何ら商品価値のない「鳥」を引き合いに出しています。野原の花とは「百合」とも訳せますが、実際には小さな白い花なら何でもこの言葉で表すことができたようです。このような特別に重んじられることもない身近な動植物を主イエスは私たちの教師として差し出されます。

では、主イエスは空の鳥や草花を教材として、私たちに何を見、何を学べと言っておられるのでしょうか。それは彼らの無力さです。彼らは強敵が現れたらひとたまりもな

く、足で踏まれたらどうしようもない存在です。そんな無力さにもかかわらず、神に守られ、生かされているのです。彼らの存在を通して、私たちにいのちを与え、これを生かし、用いてくださるお方を見上げよ、と主イエスは言われるのです。

「思い悩むな」と繰り返しお語りになる主イエスは、自然人・自由人として悠然と大自然や動植物を愛でておられるのではありません。私たちに遠くから眺め、見下ろしておられるのでもありません。このようなみ言葉を弟子たちに教え、語りつつ歩まれる主イエスは、今まさにエルサレムに向かって、十字架への歩みを進めておられるのです。人々を愛し、人々に仕えながら、世の人々から疎まれ、憎まれ、弟子たちからも裏切られるというすさまじい経験をされるのです。あらゆる苦しみをなめ、生きることの悲しみと悩みを知られたお方が、私たちのために、私たちの罪を担って十字架におかかりになるのです。ご自身のいのちを注ぎ出して私たちを贖い、赦し、生かしてくださったお方が、あなたの罪は赦されたと言われ、与えられたいのちを喜んで生きよ、と言われるのです。

ところで、今日の箇所はマタイによる福音書 6 章と並行していますが、ルカによる福音書には、マタイによる福音書にはないすばらしい主の約束の言葉があります。それは「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる」(32 節) という御言葉です。小さな群れとは教会に生きる私たちにに向けて語りかけられた言葉です。

福音書が書かれた当時、教会は強大なローマ帝国の中で吹けば飛ぶような小さな群れでした。ユダヤ人による迫害があり、次第にローマによる迫害も本格化していました。主イエスを信じていると公言することによって命を奪われてしまうかもしれない危機の中で、信仰者たちの間には深い恐れがありました。今日の日本は、当時とはまた全然違う時代ですが、私たちも日本社会の中では吹けば飛ぶような小さな存在です。表だった迫害は今のところありませんが、時代の嵐に巻き込まれる時、教会は本当に脆いのです。私たち自身、顧みて本当に臆病であり、不安と恐れを抱くことが多いのです。

けれども、そのような小さな群れを、神はご自身の民として呼び集め、この世界に遣わし、神の国の到来を告げるところ、神のご支配を映し出すところとしてくださいます。私たちが巻き込んで救いの御業を展開していかれます。それは神ご自身の喜びなのです。

この世においては、大きいことや強いことが尊ばれます。しかし、神の御前では、人間の小ささ弱さは何ら問題にはなりません。むしろ、私たちの貧しさや無力さが主の恵みと力を証することになるのです。神の国の御業を進めておられる神に信頼し、与えられたいのちを喜んで生き切るとき、そこに栄華を極めたソロモンにまさる美しさがあるではないか、と主イエスは言われるのです。